

# 狩猟採集民バカ・ピグミーのコミュニケーションにおける身体技法

平成21年入学

参加したフィールドスクール：ナミビアフィールドスクール

調査地（調査国）：カメルーン

園田 浩司

キーワード：バカ・ピグミー，コミュニケーション，ジェスチャー，狩猟採集生活

## 自分の研究テーマについて

アフリカの狩猟採集民ピグミーの社会が、しばしば「平等社会」という言葉で語られてきた理由のひとつに、「分配」という文化がある。彼らは日常生活品から食事までさまざまなものを共有しあい、ともに生活をしている。これらピグミーにおける「分配」の研究は、分配される食物の種類、場所による違い、また分配の生起頻度といった、マクロな視点で議論されることが多かった。本研究の特色は、「物の受け渡し」に関与する人々の間でみられる「身ぶり」や「しぐさ」というミクロな現象に焦点を当てている点にある。「受け渡し」の際に見られる、「もらう側」、「受け取る側」の相互行為を通して、彼らの社会においてその動作に付与された意味を考え、狩猟採集民の内的世界を記述しようとするのである。

報告者は、カメルーン南東部に暮らす狩猟採集民バカ・ピグミーを対象に、以上のような観点から彼らの「身ぶり」や「しぐさ」について調査を試みた。今回の調査で明らかになったのは、その「受け渡し」にまつわるふるまい方の多様さである。たとえばお金が手渡されるときは、それらが両者によって手で覆われるようにして手渡されるかと思えば、時にそれらがタバコ同様に、投げて差し出されることもあった。このように、彼らは両者を媒介する物や、また両者の関係に応じて使い分けているのである。

## フィールドスクールから得られた知見について

フィールドワークとは、いうまでもなく対象地域の情報を収集することであるが、この技術は今後研究者としても、あるいは実務家の立場であろうと重要であることにはかわりがない。今回のフィールドスクールにおいてあらためて実感させられたのはその点である。スクール期間中は、さまざまな立場の人たちとの交流する機会に恵まれた。小中学校の教師やその生徒たちにインタビューを行い、ゴバベブの砂漠研究所では、アメリカやドイツからやってきているわれわれと同年代の学生にレクチャーをしてもらった。さらに市場で働く女性、ナラ・フルーツを栽培する農家、また砂漠の緑地化に従事する家族など、さまざまな人たちから、その場で話を聞くことができたという点が、もっとも重要である。個人でそれだけの多種多様な人々に短期間でインタビューを試みるのは困難であるが、数多くの視点から、数多くの質問を土地の人々に投げかけることができるのはフィールドスクールの長所である。しかしながら、大勢で詰め掛けて、次々に質問に答えてもらうという方法では、決して聞くことはできないよう

な内容もないとは限らないのであり、私たちはそれを取りこぼしているのではないかと少し残念に思われた。



写真1 - 砂漠研究所の学生による講義



写真2 - 訪問した J.P.Brand 小学校

### フィールドスクールで学んだことがどのように研究テーマにいかせるか？

報告者は「物の受け渡し」のほかに、さらにカメルーン狩猟採集民バカ・ピグミーの、日常生活における仕事や休息時に見られる、ささいなふるまいに注目していた。今回得られた知見のひとつに、同じようなふるまいが、はるか遠く離れたナミビアの狩猟採集民の身体にもいくらか発見することができた点である。報告者はナミビア北部の、オシベロという地域にて、短期間ではあるが狩猟採集民ハイオムの調査を行った。短期間だったため、カメルーンで試みたような会話の中でのジェスチャーの収集まではできなかったものの、インタビューの最中に見せた地面に腰掛けた姿勢や、また女性の調理する際の立ち姿勢など、両者に類似する基本的な姿勢は数多いということが見出されたのである。彼らのささいなふるまいを見て、さらに本調査地に暮らすバカの特徴が、明確になってきたという点で、大変有意義なプログラムであった。



写真3 - 狩猟採集民ハイオムの男性